スパイラル　～推理の絆　ゼロ時間へ～

鮮血の刻印

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
スパイラル　～推理の絆　ゼロ時間へ～

【Ｎコード】
Ｎ５３５４Ｒ

【作者名】
鮮血の刻印

【あらすじ】
「『ブレード・チルドレン』の謎を追う」

その言葉を最後に、兄が失踪してから２年が経過した。
鳴海歩は、その言葉を胸に秘めながらも、いつも通りに学園生活を送っていた。
そんなある日、友人と共に屋上から校内に戻ると、悲鳴が聞こえて

きた。

悲鳴のした方へと2人して向かうと、そこには――――

スパイラル　～推理の絆～の二次創作です。

ストーリーは、漫画を基盤にしている為、大した様変わりはしません。

オリジナルのキャラによって、僅かながらも変化した盤上。

その盤上での推理――――

その果てにあるものとは・・・？

不定期更新となっております。　悪しからず。

第1話　「始まりの刻」（前書き）

本日より、スパイラルの二次創作、ゼロ時間へを開始します。

挙手をして下さった皆々様には、もう1度謝辞を。

本当にありがとうございます。

皆様に早くお届けしたい一心で、1話目を掲載しましたが、

いかんせん、ストックはありません。

なので、不定期更新となります故、予めご了承ください。

それでは、どうぞ。

第1話　「始まりの刻」

プルルルル・・・。
プルルルル・・・。

電話を告げるコール音が、静寂していた部屋に響き渡る。
そのコール音を聞き付け、1人の少年が電話に近づき、受話器を取る。

「はい、鳴海です。」

［歩か？］

電話を出て名乗った直後、間髪入れず聞き知った声が聞こえた。

「あぁ、兄貴か。」

［『ブレード・チルドレン』の謎を追う。］

「は？」

いきなり意味不明な事を言われ、歩と呼ばれた少年は間の抜けた声を出す。

［まどかにも伝えてくれ。］

それを最後に、電話は一方的に切られた。

「え……。

……兄貴……？」

以来、兄に連絡が繋がる事は無かった。

スパイラル　～推理の絆　ゼロ時間へ～

第1話　「始まりの刻」

「またここにいたのかよ……。」

制服に袖を通し、黒い髪をした1人の少年が、学園の屋上に上がった。

そこには、自分と同い年の茶髪の少年が料理の本で視界を覆って寝ていた。

「おい、起きろよ、鳴海。」

足で横っ腹を軽くつつく。

「んあ？」

急に起こった揺れに、寝ていた少年は身体を起こす。

顔に被せていた本が膝元に落ちる。

「今何時だよ……？」

茶髪の髪を揺らし、彼は自分を見下ろしている少年に問う。

「16時。」

淡々と答え、歩と呼ばれた少年を起こした彼は、先に出入り口に足を運ぶ。

「やべ……。

寝過ぎた……。」

先に向かった少年の後を追いながら、彼は先程見た夢を思い起こす。

（さっき見た夢……。
『あの日』の夢だっけか。）

身体を伸ばし、扉を開けたまま待ってくれている彼の所へ急く。

（今日で2年か……。
兄貴が失踪した、『あの日』から……。）

屋上から建物内に戻り、階段を下りきる。

と、その時――――

「きゃあああああぁぁぁぁ！！！」

――――誰かの悲鳴が轟いた。

「あー？」

「何だ？」

2人して顔を見合わせ、悲鳴が聞こえてきた非常口の方へ向かう。

「ここ……か……？」

恐る恐る非常口へと続く扉を開く。

「は……！？
フェンスがねぇ……！？」

歩が踊り場に出て、外れたフェンスが落ちたであろう下を覗き込む。

「あんたね！」

「へ？」

すると、真下から女子生徒の叫び声が聞こえる。

「あんたが突き落としたのね！？」

「あ゛……？」

「何だ、歩。
お前が殺したのか？」

歩を起こした少年は、隣で歩と同じ方向を見ていた。

そこには、赤い液体が零れている何かがあった。

「あれって……。」

「どう見ても、死体……だろうな。」

歩からの確認に、少年はいつもと変わらぬ口調で答えた。

◆◇◆◇◆

「可愛い子だな〜。」

生徒手帳にある写真を見て、和田谷巡査は頬を緩ませる。

そんな写真を見ながら屈んでいる和田谷の頭に、強い肘打ちが入る。

「う〝っ……。」

肘打ちが入った頭を押さえる和田谷の手から生徒手帳を取り上げたのは、

部下に容赦なく肘打ちを行った女性の刑事だった。

名を、鳴海まどか。

階級は警部補。

「被害者は月臣学園、2年F組の宗宮可菜（むねみや かな）。

6階の非常階段、踊り場から転落……ね。」

「け、警部補！？」

和田谷は急いで立ち上がり、彼女に敬礼する。

「これ、お願いね。」

傍を通った鑑識に、生徒手帳を渡す。

「和田谷。
この案件、事件、事故、自殺。
どれが一番可能性が低いかわかる？」

「え～と……。」

突然問われた和田谷は、答える事が出来なかった。

「答えは、自殺。」

結論を先に述べ、まどかは遺体のあった所まで歩いていく。

「これを見なさい。」

そして、足元に転がっている壊れた眼鏡を拾う。

「自殺者は大抵、死ぬ時に自分の容姿を気にするのよ。
特に女性なら、髪型や服装とかを決めてからっていう人もいる。
なのに、年頃の女子高生がこんなダサイ眼鏡をかけて自殺すると思う？」

「で、でも、被害者は眼鏡美人で常に眼鏡をかけていたからかも……。」

「生徒手帳の写真、見たでしょ？」

「あ……。」

和田谷は、先程まで見ていた写真を思い出す。

確かに、被害者は眼鏡をかけてはいなかった。
「刑事続けたかったら、もっと観察力を養いなさい。」
まどかがそう言った直後――――
「あんたが可菜を突き落としたんでしょ！！」
――――そんな叫びが響いた。
「あんたが可菜を突き落とした後、踊り場から顔を出したのを見たのよ！！」
「ギャーギャーうるせぇ女だなぁ……。
ただの事故だろ？」
「ただの事故！？
ふざけんじゃないわよ！」
「ふざけてんのはあんただろ。
俺はたまたまあそこを通っただけだ。」
「そんな言い訳が通じるとでも……。」
「それぞれの言い分は分かったわ。」
いつまでも続きそうな言い争いに、まどかが2人の間に割って入る。
「詳細は個別に……。」

しかし、捲し立てられていた側の相手の顔を見て、まどかは驚いた。

◆◇◆◇◆

「目撃者の野原瑞枝さんの話によると、
友人の辻井くんと話をしていた時、突然悲鳴が聞こえたそうです。
で、悲鳴があった方を振り返ったら可菜さんが落ちているのを目撃。
急いで現場に駆け付けたんですが、既に死亡していて、
可菜さんが落下してきた所を見たら、君達2人の姿を見たという事です。」

目の前にいる和田谷の説明に、椅子に座っていた2人の少年は黙っている。

「それで、君達はどうしてあそこにいたのかな？」

先に、肩にかかる程度に長い黒髪をした少年が口を開く。

「友人のコイツを起こしに、屋上に行ったんです。
で、コイツを起こしていつものように帰ろうとして、
悲鳴が聞こえたから踊り場に向かったんです。」

「それじゃあ、君は？」

「屋上が静かだから、ずっと寝てたんですよ。
で、後はコイツが言った通りです。
非常階段の方が騒がしかったんで、ちょーっと見たくなっただけですよ。
文句でもありますか？」

笑みを浮かべている茶髪の少年に、和田谷は可愛くない奴だと思った。

「非常口の方からは誰も逃げてこなかったんですね？」

可愛げの無い茶髪の少年より、黒髪の少年の方が話しやすいと判断したのか、
和田谷は彼の方を向いて訊ねる。

「さっきも答えた。
同じ質問には答える気が無いんですけど……。」

しかし、彼の方もまったく可愛げが無かった。

「ほう、誰も……。」

「おい、おっさん。」

ニヤリと笑った和田谷に、茶髪の少年はおっさん呼ばわりする。

「おっさんとはなんだ！」

憤慨する和田谷を余所に、茶髪の少年の隣にいた黒髪の少年は、笑っていた。

「もしかして俺らを疑ってんの？
どーせさぁ、友達とやらが感情的になってるだけで、
事故か自殺で終わるんじゃないの？」

「同感だな。
それにフェンスは、元々ボルトの接合が甘かったらしいし。」

「用務員の話によると確かにそうなんだけど、
それでも強い力をかけないと外れなかった事が確認されてるのよ。
ボルトや金網も、かなりの負担がかかって曲がった状態だったわ。
」

「そういやぁ、確かに変形してたな。」

まどかの解説に、黒髪の少年が同意した。

「つまり、足を滑らせて寄りかかった程度じゃ外れないわ。」

「事故の線はかなり薄いみたいだな。」

「…自殺は？」

「遺書の類も無いし、それに自殺を否定する要素もないから、
今の所は、突き落とされたとしか考えられないわね。」

「フッフッフッ……。」

その時、和田谷が不気味に笑う。

「いいか！？
６階以外の非常口は、最近使った形跡が無く、階段から逃げた奴もいない。
さらに！　君達自身が非常口から逃げてこなかったと証言している！
す・な・わ・ち・っ！　君達２人がかりで被害者を突き落としたという事だ！
観念しろ、悪党！」

そんな、ドヤ顔する和田谷を、まどかが殴って黙らせる。

「うるさいわよ。」

「だってー……。
それに、もしかしたら『あの事件』について……。」

それ以上喋らせないよう、まどかは和田谷の頬を抓る。

「あんた達、自分の置かれた状況が分かってる？」

「面倒な事になったって事だけは。」

「俺も。」

「もういいわ。
あんた達はもう帰って夕食の支度しなさい。」

「警部補！？

何甘い事を……！」

「和田谷、そっちの茶髪の方の名前は？」

「へ……？

え……えっと……。」

急いで手帳を捲り、名前を確認する。

「鳴海……歩……。

ん？　“鳴海”？

ま、まさか……。」

「私の弟よ。」

まどかに真実を突きつけられ、和田谷は呆然とした。

「七光り……ってのは語弊があるが、あながち間違いじゃねぇよな。」

歩と一緒にいた少年の呟きに、歩は興味無さげにしていた。

「俺はそんなのねぇから、苦労しそうだぜ。」

「歩と一緒にいたって事なんだから、あんたも今日は帰っていいわよ。」

「そりゃどうも。」

「良かったな、泉水。」

「あぁ。」

歩に名字を呼ばれ、少年――――泉水修耶は笑みを浮かべた。

第1話　「始まりの刻」　了

第1話　「始まりの刻」（後書き）

鮮血
「はい、主人公の泉水修耶（いずみしゅうや）です。」

修耶
「どうも。」

鮮血
「伝説・改先生、名前の応募、ありがとうございました！」

修耶
「つーか、何で俺と鳴海が殺さなきゃいけねぇんだよ・・・。」

鮮血
「動機はその内出てくるよ。」

修耶
「出てこねぇよ・・・。
殺してねぇんだから。」

鮮血
「まぁまぁ。
君と歩の推理は、次話に取り入れる予定だから。」

修耶
「俺って推理できんの？」

鮮血

「それなりには・・・。
っていうか、君にはもっと別の隠し事があるけどね。」

修耶
「それも次話で分かるのか？」

鮮血
「一部分だけ・・・。」

修耶
「ったく、メンドイなぁ・・・。」

鮮血
「次回もお楽しみに。」

修耶
「感想、誤字脱字をお願いします。」

第2話　「真実の旋律」（前書き）

鮮血
「2話目です！
って、早速ストックが……。」

修耶
「逆お気に入りユーザー登録が１００名様を突破したらやるって、
お前が意気込んで言ったんだろうが……。」

鮮血
「今回は、修耶とあの2人が会話します。」

修耶
「こんなに早くに出していいのかよ……。」

鮮血
「まぁ、なるようになるんじゃん？」

修耶
「まったく……。」

第2話　「真実の旋律」

事件のあったその夜。

歩と修耶は、電話で話し合った。

「鳴海、どうした？
なんだか疲れた声をしているぞ。」

「ねーさんが面倒だったからな。」

そう答えると、電話口で笑っているのが聞こえた。

「だろうと思った。」

「人が夕飯を作ってやったてのに・・・。」

「お前の事だ。
どうせ犯人扱いされたのが癪で、レトルト辺りで済ませたんだろ。」

「正解。
めざとくレトルトの袋を見つけられてな。」

「ははっ。
お前らしいなぁ。」

そこで、互いの会話が途切れた。

否、切ったのかもしれない。
「俺ら、結構やばいらしいぜ。
動機が出たら、おじゃんだ。」
「だろうな。
けど、俺らがやった場合、おかしな点がある。」
「言ってみろよ。」
「もしも俺達が協力したのなら、わざわざフェンスと一緒に落下させるか？」
「答えは、『Ｎｏ』だな。」
「あぁ。
２人がかりで、被害者を持ちあげて落とせばいい。
フェンスと一緒って時点で、おかしいと思って欲しいもんだ。」
「まぁ、頭が悪けりゃしょうがねぇよ。」
「そういやぁ、あのバカっぽいおっさん刑事が言ってた、
『あの事件』ってなんだろうな？」
「さぁな。
ねーさんもそれに関してははぐらかしてきた。」
「ふーん。」
「それよりお前、野原瑞枝がポケットにしまった奴……。

あれってなんだか分かるか？」

［いや……。
俺も奴から目を離しちまったからなぁ……。］

「あっそ……。」

［まぁ、犯人探しは明日からでいいだろ。
これ以上は互いに収穫が無いだけだし。］

「そうだな。
じゃあな。」

電話を切り、歩は深い溜息をついた。

「どう転がるかな……。」

◆◇◆◇◆

一方、修耶は切った電話を適当な場所に置き、自室を出る。

「待たせて悪かったな。」

リビングに入るなりそう言うと、赤紫に眼鏡をかけた少年が立ち上

がった。

「おせぇんだよ。」

「だから悪いって言っただろ、バーカ。」

「んだと！」

「2人とも、子供じゃないんだから……。」

喧嘩しそうになる修耶と少年を、灰色の髪に、それをツインテールにした少女が止めた。

「「お前に言われたくねぇよ。」」

赤紫髪の少年と同い年のくせして、その身長はかなり小さかった。

「2人してハモって言わないでよね！」

憤慨する少女を少年の方に任せ、修耶はソファーに座る。

「で、今回の依頼は？」

「決まってんだろ？
いつも通り、“ハンター”の処理だよ。」

「お前ら、あんまり活発に動くなよ？
そろそろアイズが日本に来るらしいし。」

「分かってるよぉ。」

「とりあえず、詳細はコレな。」

紙切れを修耶に渡し、2人は玄関まで歩いていく。

「しっかり頼んだぜ、“パラディン”さん。」

「へいへい。」

彼らの方に視線を向けず、修耶は手をヒラヒラと振っただけだった。

バタンと扉が閉じた音がした後、彼は渡された紙切れを見ながら、机に向かう。

引き出しを開けて、古びた筆箱の中から金色の何かを取り出した。

「手持ちはあと6発だけか。
まぁ、滅多に使わないからいいか。」

スパイラル　～推理の絆　ゼロ時間へ～

第2話　「真実の旋律」

翌日――――

歩は第2音楽室にある、ピアノの前にいた。

鍵盤を慣れた手付きで軽く叩く。

ポーンとピアノ独特の旋律が、一瞬だけ姿を現し、すぐにまた消え去る。

（兄貴に出来ない事なんて無かった……。
勉強も、運動も……。）

ピアノの椅子を引き、そこに座ってピアノを弾く。

（ピアノでさえも……。）

奏でられる旋律は、称賛されてもおかしくはない程腕前だった。

（いつもああなりたいと思っていた……。

１０代であっさりと世界的なピアニストになり、
２０代で刑事となり、今では『名探偵』と呼ばれるような兄貴に
……。）

その旋律は、徐々に変化していく。

普通の人には分かり辛い変化だが、伴走者である歩にも、それは分かった。

（でも俺は……。
俺は、兄貴を憎んでいるのかもしれない……。）

その時、バタンと大きな物音が聞こえた。

その音に驚いた歩は、ピアノの演奏を止めてそちらを見る。

「あれー？
もう止めちゃうんですか、ピアノ。
せっかくだから最後まで聞きたかったですぅ。」

「…あ、あんた誰？」

歩の視線の先には、茶髪の髪をツインテールにした少女がいた。

「私、２年で新聞部の結崎ひよのと申します。」

「……あぁ？　新聞部？」

ひよのと名乗った少女の案件に、歩は意味がわからなかった。

「それでですね、人を殺した心境をお聞かせください！」

こちらの事を一切合財気にせず、ひよのは歩にマイクを突き立てる。

「俺はやってねぇ……。」

「は？」

「お・れ・は・やっ・て・ねぇ。」

ちんぷんかんぷんな顔をしたひよのに、マイクを勝手に分捕り、答える。

「……ったく。」

呆れた歩は、ひよののいる方向にマイクを抛る。

「でも、学校中1年の鳴海がやったって噂ですよ。」

「何でそんなに噂が早いんだよ！？」

「それは、積極的に噂を流している人がいるからですよ。」

「野原瑞枝か……。」

歩はそれが、誰の仕業であるかすぐに察し、苛立たしげに頭を掻く。

「宗宮さんの親友ですからねぇ……。」

考え込むようなポージングで勝手に喋り出したひよのを無視し、歩

は先に音楽室を出る。
「待って下さいよ、鳴海さん。」
しかし、しつこい事にひよのは歩を追いかけてきた。
「鳴海さんってばぁー。」
「……おい。」
「はい、なんですか、鳴海さん？」
「名前を連呼するな……。」
「ごめんなさい、“鳴海さん”。」
「……。」
怒りを込めた眼差しでひよのを睨むも、当人はニコニコ笑ったままだった。
「あんた、何で俺についてくる訳？」
「鳴海さんが犯人では無いと言うのなら、
それが真実であるかどうか、鳴海さんの動向を探らなくてはなりません。」
「なん……。」
「ダメって言っても無駄ですよ。

勝手についていきますから。」

（くそ……。）

歩は内心で嘆息するしかなかった。

「ところで鳴海さん、どこに行こうとしているんですか？」

「決まってんだろ。
野原瑞枝に文句を言いに行くんだよ。」

◆◇◆◇◆

弓道場――――

「鳴海さんも意外とまぬけですね。
居所が掴めていない人に会おうとするなんて。」

「うるせぇ！
だいたい、何であんたがアイツがいそうな場所を知ってんだよ？」

「新聞部に分からない事は無いんですよ♪」

明るく言うひよのに、歩は頭を掻く。

「あんたさー、もしかして噂の『情報通』？
学長さえ怯えるとかなんとか……。」

「ちょっとあんた！」

その時、女性の声が轟いた。

「…っと、主役のおでましだ。」

歩がそちらに視線を向けると、目くじらを立てている瑞枝がいた。

「何の用よ！？」

「ちょっと挨拶にな。」

瑞枝とは打って変わって、歩は至って冷静だった。

「瑞枝。」

そこへ、先程まで弓を引いていた男子生徒が彼女の傍らまで来た。

「あの人、3年の笹部先輩です。
瑞枝さんの彼氏さんです。」

その人物の情報を、ひよのがくれる。

「瑞枝に近付くな、人殺し……。」

「っ……。」

その言葉に怒り心頭に発した歩は、笹部を殴ろうとするが――――

「鳴海、止めろ……。」

――――その手を、修耶が止める。

「泉水……。」

「すみません、笹部先輩。」

笑顔を作り、相手の怒りを削ぐ。

「笹部先輩、喧嘩は強いぞ。」

こっそりそれを教えてもらい、歩は命拾いした。

「野原さん。」

そして、歩は瑞枝の方を向く。

「あんたのトリックは俺が解く。
はめた相手が悪かったな。」

不敵な笑みを浮かべ、歩はその場を後にした。

◆◇◆◇◆

所変わって、６階の非常口。

歩は、ひよのと修耶の２人と一緒に、宗宮が転落した所に居た。

「大体、おかしいんだ。
野原瑞枝は、ろくに情報が無い段階で事件を殺人だって決めつけやがった。
事故の可能性があるのに…だ。」

「それで野原さんが犯人だと……？」

「まぁ、こっちも確証は無いがな。」

そう言って修耶は、事件当日、野原が事件を目撃した場所を見た。

「問題は、アイツがあそこらへんにいたって事だな。」

「そうですよ。
野原さんは目撃者なんですよ？」

「……フン。
親友が目撃者って時点で、怪しいんだよ。」

「そんな事を言ったら、辻井郁夫さんはどうなんですか？」

「…誰だ、それ？」

「野原瑞枝と一緒に居た男子生徒だよ。」
「そんなに重要なのか？」
「俺が知ってるのはさっき言った事ぐらいだ。」
すると、修耶の代わりにひよのが答えた。
「宗宮さんの片想いの人ですよ。
辻井さんは野原さんのバイト仲間で、
野原さんは2人をくっつけようとしていたそうです。」
「よくもまぁ、そんな事まで知ってるな……。」
「あんた、遠くで針が落ちる音まで聞こえてんじゃねぇの？」
修耶は驚きと呆れがない交ぜになった表情を浮かべ、
歩は若干ながら戦慄していた。
「恋愛の話なんて、同性間じゃ筒抜けですよ？」
そう言って、ひよのはメモ帳を取り出す。
「まぁ私の場合は、男子の方も把握してますけど。
鳴海さん、以前寝言で女性の名前を……」
「うぁ！？」
咄嗟に口をふさぎ、そこから情報が漏れ出るのを抑える。

「お前、そんな事があったのかよ……。」

「うるせぇ……。」

もう現場に居ても収穫は無いと考え、３人は場所を移す事にする。

「問題は動機だな。
恐らくは、口封じって所か？」

前を向いたまま、後ろにいる歩に訊ねる。

「多分な。
ある事件に関わってたらしいし……。」

「話が大きくなりましたねぇ……。」

（宗宮が関わっていた事は確かなんだが……。
ねーさんの様子だと、俺に知られたくは無いって感じだったな。）

そこまで考え、歩はその場に立ち止まる。

（ひょっとして、兄貴がらみなのか……？）

◆◇◆◇◆

「野原と辻井って奴がいたのは、ここら辺だな。」

「けど……。」

歩の隣に立った修耶が、踊り場の方へ視線を走らせる。

「ここからだと踊り場は見え辛いな……。」

修耶と歩は同時に頭を掻く。

「あの、鳴海さん、泉水さん。
事件当日、６限目の授業の後に、宗宮さんが職員室に呼びだされた事、知ってます？」

「は……？」

「そういやぁ、そんな放送がかかってたな。」

「お前、知ってたんなら先に言えよ！」

「今の今まで忘れてた。」

悪びれる様子もなく、修耶は笑っていた。

「けど、職員室で宗宮さんを呼んだ人はいなくて、
しかも放送を担当した生徒は、そうするようにメモが置かれてたらしいんです。」

「どっからそんな情報を……。」
「地道な聞き込みですよ。
お役に立ちましたか？」
褒められたいのか、ひよのは顔を輝かせていた。
それを無視し、歩は修耶と共に考える。
「それにしても、今の話……。」
「あぁ。
恐らくは野原の仕業だろうな。」
そこまで言って、互いに考え込む。
「そうだ。
笹部先輩から聞いたんだが、野原は右手の指に怪我をしたそうだ。
」
「怪我？」
「あぁ。
ただ、その原因は適当にはぐらかされたそうだ。」
（あと、何か……。）
空を見上げながら考えていると、背後で誰かを呼んでいる声が聞こえた。

何気なくそちらに目を向けると、丁度2階の友人に手を振っている女生徒がいた。

（ッ！！）

その時、歩の中で全てが繋がった。

「なるほどな……。
これが事件の旋律か……。」

不敵な笑みを見せる歩に、修耶とひよのは首を傾げた。

第2話　「真実の旋律」　了

第2話　「真実の旋律」（後書き）

修耶
「鳴海、どんだけ推理力があんだよ……。」

鮮血
「ねー……。
まぁ、そういうキャラだからね。」

修耶
「やれやれ……。
次回は解決編をお送りします。」

鮮血
「感想、誤字脱字がありましたらどうぞ。」

第3話　「幽明の真実」（前書き）

鮮血
「時間がかかってしまい、申し訳ありません！」

修耶
「少しはちゃんとやれよな。」

鮮血
「いや、終わりが見えている物をちゃっちゃとやろうとして、
こっちが疎かになっちゃったんだよね……。」

修耶
「やれやれ……。」

鮮血
「それでは、3話目をどうぞ。」

第3話　「幽明の真実」

歩達が、真実に近付きつつある時。

「野原さん。」

瑞枝は、まどかと和田谷に呼び止められた。

「ちょっといいかしら？」

◆◇◆◇◆

場所を移し、人気のない所に移動したところで、瑞枝は口を開いた。

「どうしてアイツを逮捕しないんですか！？
どう考えたって、アイツが犯人じゃないですか！」
「逮捕となると、慎重に動かないといけないの。
それに、自殺の可能性だって……。」
「可菜は自殺なんてしません！」
「今日は別件です。
あなた、園部という男性を知っているかしら？」
「だ、誰ですか？」
それを聞いた瞬間、瑞枝の態度がすぐに変化した。
先程とは打って変わって、とてもおとなしくなっている。
「1週間前に、その男性が背後から襲撃されるっていう事件があったの。
彼は今、意識不明の重体で病院に居るのだけれど……。
その犯人を、宗宮さんが目撃したみたいなの。
でも、彼女はそれが誰なのか教えてくれなかった。」
そこで言葉を切り、まどかは瑞枝に射抜くような視線を向ける。
「あなた、彼女から何か……。」
「可菜からそんな話は聞いた事ありません！」

まどかの言葉を遮り、瑞枝は力強くそれを否定する。

「もしかして刑事さん……。
私を疑っているんですか？」

「そう聞こえましたか？」

疑ってくる瑞枝とは対称的に、まどかは笑顔だった。

「もう帰ります。」

踵を返し、瑞枝はその場を後にした。

◆◇◆◇◆

まどかと和田谷は車に戻り、勤務先に走らせる。

その時、まどかの携帯電話が鳴った。

「もしもし？
あぁ、あんた……。」

まどかは、眼前を見据えたまま電話のやり取りを続ける。

「分かった、すぐに調べる。
あんたも勝手に動くんじゃないわよ。」
強く言い聞かせて、電話を切った。
「弟さんですか？」
「署に急いで。」
和田谷からの質問には答えず、まどかはそう言った。
（やっぱり、『名探偵』と呼ばれたあの人の弟…か……。）

スパイラル　～推理の絆　ゼロ時間へ～
第3話　「幽明の真実」

2日後――――

瑞枝が教室に入ると、彼女の机の上に手紙が置かれていた。

「何コレ……？」

それを広げ、中身を読む。

すると、見る見る彼女の顔が怒りに歪んでいく。

それを握りつぶし、瑞枝はそれをゴミ箱に放った。

◆◇◆◇◆

放課後――――

「本当に来るのかよ？」

修耶の隣で、歩はそれを彼に訊ねた。

「お前の名前で書いておいたから、多分くるだろ。」
「人の名前を勝手に使うなよ……。」
そう呆れていると、屋上の扉が開かれた。
「おいでなすったぞ。」
「マジかよ。」
歩の視線の先には、瑞枝がいた。
「すごいですね、泉水さん。」
その様子に、ひよのが変に感激する。
「鳴海が嫌われているからこそ出来た芸当だな。」
「嬉しくねぇよ……。」
立ち上がり、歩とひよのが瑞枝の所まで向かった。
「話って？」
「手紙にも書いてあっただろ？
宗宮可菜の転落の真相が分かったって。」
修耶が歩の隣に並び、そう言う。

「真相も何も、あんたが殺したんでしょ？」

「いや、そいつは間違いだ。
そもそも、何で宗宮は踊り場に居たと思う？」

「知らないわよ……。」

「それは嘘だな。」

歩がその言葉を切り捨てる。

「あんたは、宗宮に「告白が上手く行ったらサインを出す」とでも言って、
彼女にC棟6階の非常階段から、それを確認させたんだろ。」

「こいつが宗宮可菜が踊り場に居た理由。
そして、これがあんたの魔法の種……彼女を墜落させた『見えざる手』だ。」

懐からサングラスを取り出し、それをかけた。

「似合わねぇな……。」

「…っていうか、サングラスが？」

修耶と瑞枝から冷たい視線を向けられた為、歩はすぐさまサングラスを取った。

「要するに『眼鏡』って事だよ。」

サングラスをしまって、瑞枝に向き直る。

「何故宗宮は眼鏡をかけたまま落下したのか？
どうして普段はかけていないそれを、あの時はかけていたのか。
告白の手伝いをしてもらう事になった宗宮は、
それを疑いもせずに非常階段にやってくる。
そして、辻井とあんたが所定の位置にやってくれば、
近視の彼女は当然、眼鏡をかけるはずだ。　サインを見落とさない為に。」

そこで言葉を切り、その後を修耶が引き継ぐ。

「だが、その眼鏡がすり替えられていたら？
度が違って彼女の眼には合わず、直線を歪ませるような狂ったレンズだとしたら？」

「そんな事、出来る訳……。」

反論しようとする瑞枝の言葉を、ひよのが遮る。

「宗宮さんは事件の日、職員室に呼び出され、教室を離れています。
当然、その時には眼鏡をしていませんでした。
彼女が職員室に向かっている間に、気付かれずにすり替えることは可能です。」

「職員室への呼び出しを促す放送も、あんたの仕業だろ？」

「ッ……。」

修耶からの指摘に、瑞枝は苦々しい顔をした。

「その間違った眼鏡をかけた宗宮は、
たちまちふらつき、支えを求めてフェンスに手をかける。
しかし、壊れたフェンスは彼女を支え切れずに……。」

「宗宮もろとも落下していくって訳だ。」

「だが、この方法にはどうしても『眼鏡』という物証が残る。」

言いながら、歩は一歩一歩瑞枝に近付いていく。

「だから真っ先に墜落現場に駆け付け、予め壊しておいた彼女本人の眼鏡と、
トリックに使用した眼鏡を、どさくさに紛れて交換しないといけない。
だからあんたは、急いで証拠品となる眼鏡を回収した。
そしてその時……。」

グイッとポケットに突っこまれている瑞枝の腕を引く。

「レンズの破片で指を切った。
違うか？」

瑞枝の指には、修耶の言った通り絆創膏が貼られていた。

「新聞読んで無いの？
可菜は誰かに突き落とされたのよ！
あんたの説明じゃ、まるで事故みたいな言い方じゃない！」

歩に掴まれている腕を振り解き、瑞枝は捲し立てる。

「大体、フェンスは寄りかかったぐらいじゃ外れなかったはずよ！」
「突き落とされたと判断されたのは、フェンスが強い力で押された形跡があったから。
だがそんなもの、予め歪ませておいて、少し触れれば外れるように細工すればいい。」
いつの間に背後に立ったのか、修耶の説明が後ろから聞こえてきた。
「宗宮自身が突き落とされた証拠は無い。」
そして、歩は指を突き立てて瑞枝にハッキリと言った。
「“あんたが犯人だ！”」
だが、それに取り乱す事も無く、瑞枝は淡々と聞き返す。
「証拠は？
すり替えたとか、予めとか……。
そんなの全部、あんたの想像じゃない。」
「でもレンズの破片が合わないのは確かなのよ。」
そこへ、まどかの声が聞こえてきた。
「レンズの破片に、一部形も度数も合わないのが混じっているわ。」
瑞枝は急いでそちらの方を向き、必死に言葉を探る。

「……ひ、引っかけようとしても無駄ですよ。
そんな嘘……。」

「残念ね。
合わない破片は、被害者の目元に刺さっていたものなの。
回収した覚えはあるかしら？」

「ッ……。」

見る見るうちに、瑞枝の顔が青ざめて行く。

「それに、あんたがポケットの中に何かを隠した事も分かってるよ。
」

修耶のその言葉に、瑞枝はそれを否定するように右腕で虚空を薙ぐ。

「コイツがそう言っているだけでしょ！？
自分の嫌疑を逃れる為に……。」

「それでも、破片の矛盾は残る。」

修耶の口から淡々と述べられるそれに、瑞枝は徐々に焦りを覚える。

「誰の証言であれ、あなたは疑わしいの。」

「…何言っているんですか？
私は可菜の友達ですよ。
動機が無いじゃないですか。」

劣勢に立たされた瑞枝は、まどかの脇を通って踵を返す。

「どうかしてます。」

だが――――――

「“ブレード・チルドレン”」

――――――その単語に、瑞枝は反応してしまった。

「やっぱりあなた、園部の事件に関係しているようね。
宗宮さんの事も、口封じだと考えれば納得がいくわ。」

立ち止まっている瑞枝に、まどかは述べて行く。

「きちっとした証拠が見つかるのは時間の問題よ？
あなた、逃げ切れるかしら？」

「何を言っているんですか？」

冷静に返したつもりなのだろう。

しかし、そんな瑞枝の額には冷や汗が滲んでいた。

「訳がわかりません。
失礼します！」

扉を乱暴に閉め、彼女は校内へと戻って行った。

「…ねーさん。」

「あ……。
あんたには、借りが出来たわね。」
「誤魔化すなよ。」
歩は先程よりも強く言い、続く言葉を封じた。
「2年前に兄貴が残していった言葉……。
俺だって忘れてねぇからな……。」
不穏な空気が、周囲を包む。
「…ねーさん……俺は……。」
歩が何かを言おうとした刹那――
「キャアアア！！！」
――悲鳴が轟いた。
5人が急いで校内に戻る扉を開けて、中に戻る。
「ッ……。」
だが、その足はすぐに止まってしまった。
「嘘だろ……おい……。」
彼らの視線の先に居たのは――

「野原瑞枝……。」

――――“心臓に矢が突き刺さっている野原瑞枝”の姿だった。

第3話　「幽明の真実」　了

第４話　「真実の行方」

目の前に仰向けで倒れている少女。
その左胸には、１本の矢が突き刺さっていた。
傷口からは血が滲み出ており、制服を赤く彩る。

「嘘だろ……。」

その惨状に、歩が苦々しく呟いた言葉が、大きく聞こえた気がした。
急いで倒れている瑞枝に駆け寄り、まどかが脈を取る。

「ダメだ、脈が無い……。」

「警部補！
あっちの屋上からですよ！」
「分かってる！」
狙撃位置を確認した和田谷の言葉に、まどかも気付いていると吼える。
「歩、修耶くん！
犯人を追うから私を先導して！
おさげのあなたは、和田谷を向こうの屋上まで案内！」
的確な指示を、大きな声で伝えていると、下の階から3人の男子生徒が顔を出した。
「あの、何かあったんですか？」
「貴方達！
悪いけど警察と救急車を呼んで！」
彼らにも指示を出し、まどかは歩の案内について行くべく駆けだした。
（せっかくここまで辿り着いたのに……。）

第４話　「真実の行方」

「あぁ……大丈夫かな？
ただでさえ単独行動で睨まれてたのに……。」

あれから数十分経過し、警察も学園に到着した。

しかし、まどか達の単独捜査も虚しく、瑞枝を殺害した犯人は見つ

からなかった。

そして、今まどかはその失態を怒られていると言う訳だ。

「図太い神経してるから、大丈夫だろ。」

心配している和田谷とは対称的に、歩は至って冷静だった。

「それより、こんくらいのゴムボールを探してほしい。」

「は……？」

いきなり言われた和田谷は、訳が分からず間の抜けた声を出した。

「そいじゃ、よろしく。」

手をヒラヒラと振って、彼はその場を後にした。

◆◇◆◇◆

「ふぅ……。」

溜息をついて、ソファーに座りこむ。

「な・る・み・さ・ん！」

そんな歩に、背後からひよのの腕が回された。

「ッ……！」

それを離させ、彼はひよのの方を向く。

「お役立ちひよのちゃんです。
何かお聞きになりたい事は？」

「そうだなぁ……。
宗宮可菜が関わっていたっていう事件、分かるか？」

「園部って奴が襲撃されたって事件だな？」

「あぁ。」

「分かりました！
このひよのにお任せを。」

小走りに去って行ったあとで、修耶が口を開く。

「妙だな……。」

「何がだ？」

「普通なら、こういう事には首を突っ込みたく無くなるんじゃないかと思ってな。」

「あれが、『情報通』って呼ばれる所以なんじゃねぇの？」

「あんまり信用すると、後で痛い目を見るかもな。」

「例えば？」

「情報を渡した代わりに、お前の命を寄越せ……とか？」

「何でお前はいっつも、そう物騒なんだよ……。」

「さぁな？
じゃあ、俺も園部について調べてくる。
お先。」

歩を残して、修耶は先に帰宅した。

◆◇◆◇◆

「ったく！
野原瑞枝は殺されるし、謹慎くらうしで……。
もう最悪！」

その夜――――

まどかは、夕食を食べ終わった後、１人でゲームをしていた。

「あぁー……負けた……。」

ゲームに敗れると、そのコントローラーを放り、寝転がる。

「あの後、野原瑞枝を尾行して、仲間と接触する所を押さえようと思ってたのに……。
いきなり殺されるなんて、反則よ……。」

そう呟く彼女の近くでは、ビールの空き缶と料理の皿を取りに来た歩がいた。

「……あんた、首突っ込むんじゃないわよ……。
あんただけじゃなく、修耶くんもね。」

だが、歩はそれに従うどころか、まどかの額に空き缶をぶつけた。

「何すんのよ！」

「兄貴が消えて、丁度２年だ。」

「忘れたと思ってんの？
だからあせ……。」

「だからって焦るな。
大事な物を見落とすぞ。」

「ッ……。」

真剣味を帯びたその言葉に、まどかはクッションを投げつけた。

「っ！？」

「私に説教なんて、１０年早い！」

◆◇◆◇◆

翌日――――――

「被害者の名前は、園部隆司。
５１歳、独身。
襲われたのは夜１０時過ぎで、自宅近くの歩道だったようです。」

ひよのからの説明を隣に聞きながら、歩は修耶と共に廊下を歩いていた。

「凶器はバットのような鈍器。
今現在は、意識不明の重体だそうです。
で、警察は通り魔の犯行とみて捜査中ですね。」

「泉水、お前の方は？」

「コイツが言った通りだよ。
ほれ、新聞のコピー。」

紙切れを渡され、歩は推理を展開する。

「野原は宗宮に犯行を目撃され、親友のよしみで自首を勧められる。
しかし、あのトリックで野原は宗宮を殺害……。

後に自分も殺される……か。」

「で、昨日の事件について分かった事は？」

思考を巡らせる歩の代わりに、修耶がひよのに訊ねる。

「えっと……。
校内に不審人物は無し、弓はB棟の屋上に放置、野原さんはほぼ即死。
これぐらいですね。」

「ふーん……。
泉水は、何かあるか？」

「そういやぁ、昨日、俺と途中で別れたよな？」

「あぁ。」

まどかの先導は歩に任せて、修耶は一足先に事件現場に戻ったと言う。

「それで、凶器に使われた矢で気になる事があるんだ。
真中で1度、折られていたんだよ。」

「……なんだって？」

「つまり、２つに折れたものを接着剤とテープでくっつけられてたんだよ。」

「もしかしたら、足が付かないように弓道部で使った物を利用したんじゃないですか？」

不思議に思っていると、ひよのがそんな事を言った。

◆◇◆◇◆

歩らは、Ｂ棟の屋上にいる和田谷と合流した。

「こんな所から狙えるなんて、弓道部の笹部以外にいない！」

「……犯人はここから殺したんじゃない。」

「へ……？」

歩の確信めいた宣言に、和田谷は驚いた。

「このＢ棟の屋上から、野原さんが殺されたＡ棟の現場まで、直線距離にして約１００メートル。

事件当時は、やや横風があったそうです。」

ひよのが丁寧に説明し、歩が続ける。

「あそこは暗がりになって狙いなんてつけられない。
その上、この距離だ。
命中させんのは神技だよ。」

「恐らく犯人は、凶器の矢を持って野原を階段の死角で待ち伏せて、
下りてきたアイツを刺し殺し、
あたかもB棟の屋上から放たれた矢に倒れたようにしたんだろ。」

柵に背を預け、片手をポケットに突っ込んで修耶は説明する。

「そうすれば、A棟にいた犯人にもアリバイが出来ます。」

「で、弓は予めB棟に置いておけばいい。
矢を使ったのは、恐らく笹部に容疑をかける狙いもあるんだろ。」

歩とひよのの補足に、だがしかし、和田谷は反論した。

「でも、ここから撃ったとしか考えられないんだ！」

その言葉に、歩達3人は不思議そうに首を傾げた。

「事件当時、階段の所に居た3人の学生が、
悲鳴があった時、誰も降りてこなかった事と、
更には周りに誰もいなかった事を証言している。」

3人の学生――――辻井郁夫、秋吉進、千葉幹也らは次のように証言したそうな。

悲鳴が聞こえ、3人で顔を見合わせていた所、上の階から足音が聞こえてきた。

そこで、自分らも上の階に行ってみたそうだ。

そして、彼らがいる間は誰も階段を昇り降りしなかったと。

「それに、悲鳴が聞こえるまで3人とも一緒だったし、共犯は考えられない。
屋上と階段の間には、隠れられる場所なんて無い！」

「……って事は、不可能犯罪ですか？」

「いや……。
俺はそうは思わない。」

フェンスを強く一握りして、歩はそこから離れる。

「あんた、そろそろ行かねぇと昼飯食いっぱぐれるぞ。」

ひよのにそう告げて、泉水と共に踵を返した。

「そうだ……。」

だが、1度足を止めて和田谷の方を見る。

「刑事さん、3人組のうち警察と救急車を呼びに行ったのは？」

「えっと……秋吉と千葉だな。
辻井が1人で現場に残ってる。」

「ゴムボールは見つかったか？」

「あぁ。
なんでか、廊下の消火器の裏に1つ……。」

「それから指紋は？」

「野原瑞枝に指紋が検出された。」

その報告を聞き、歩は笑った。

「なら問題ない。」

◆◇◆◇◆

［これが今までの捜査状況です。］

歩らと別れた後、和田谷はすぐに現状をまどかに連絡した。

［でも弟さん、もう真相を見抜いているみたいで……。
一体どういう教育してるんです？］

「私の所為じゃないわよ。
そういう“血”なの。」

［血？］

「…こっちの話。
また何か新しい進展があったら連絡して。」

受話器を置いて、その場に座り込む。

（警視庁の名探偵と呼ばれた兄……そしてその弟……。
私じゃ敵わないのかしら……。）

◆◇◆◇◆

放課後――――

「弾かないんですか？」

ひよのからの質問に、ピアノの前に突っ立っていた歩は1つ息を吐いた。

「……嫌な事を思い出すのは目に見えているからな……。」

「……お前、犯人もトリックも分かってるんじゃないのか？」

目を瞑り、頭の後ろに手を交差させている修耶が訊ねる。

「だいたいは…な。
まだ動機が引っかかるが……。」

「んー……。
ではでは、聞いてビックリのひよのちゃん最新情報です！」

パラパラとメモ帳を捲り、ある1箇所でその手を止める。

「宗宮さんを片想いしていた人がいるんです。
当然その人は、野原さんが殺したと知れば怒りますよね。
その上、宗宮さんも自分の事を好きだったと知れば、その怒りたるや……。」

「あんた、本当に恐ろしい奴だな……。」

「失礼ですね！」

憤慨するひよのに、歩は苦笑する。

「悪い悪い。
……じゃあ、ねーさんを呼んで解決編を始めようか。」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5354r/

スパイラル　～推理の絆　ゼロ時間へ～

2011年10月7日06時15分発行